

「御厨」と「御厨栄町」

池田
治司

『角川日本地名大辞典 二七 大阪府』（角川書店、一九八三年）によれば、「栄町」というのは現在単独の地名だけでも、池田市・泉佐野市・門真市・高槻市・羽曳野市・八尾市と大阪府の各所に点在する。ましてや「御厨栄町」のように固有の地名と合体したものであると、大阪府にはさらに多くの「栄町」が存在することになる。しかも昭和十九年（一九四四）の池田市の「栄町」を除けば、「栄町」はいずれも戦後の高度経済成長期以降に生まれた地名で、いわば経済発展を追い風に町の繁栄を願ってできた新開地なのである。ちなみに、「御厨栄町」は大阪商業大学の所在地であるが、前記の辞典によれば、これは昭和五十六年（一九八一）からの地名で、もとは東大阪市御厨・川俣・下小阪の各一部であった。『谷岡学園五十年史』（学校法人谷岡学園、一九七八年）の口絵には昭和三十三年（一九五八）ごろの校地周辺の航空写真（図1）が掲載されているが、大学のまわりには広々とした田園風景が広がっており、地名の起源がしのばれる。

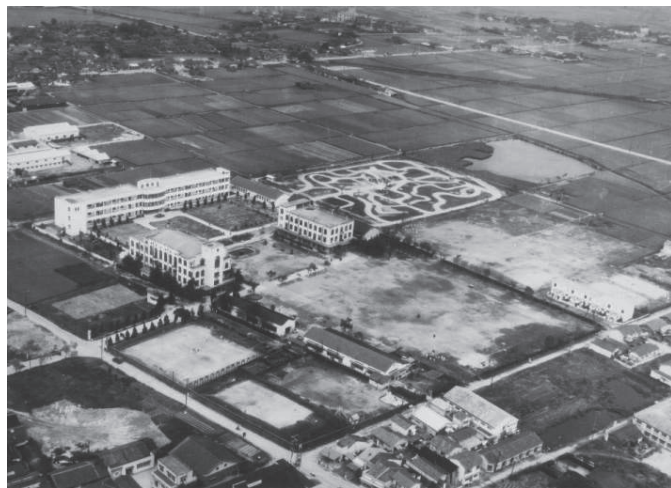


図1 昭和33年ごろの大阪商業大学周辺の航空写真
(左上が旧御厨村)

入江のような観をなしていたことあり、(中略)平安初期には河内江とよばれていたようである(図2参照)。この河内江は、古代朝廷へ供物・水産物を貢進する「供御江」に指定されていた。いわゆる「御厨」である。『延喜式』には、内膳司所管の供御の御厨のひとつとして「河内江厨」が列せられている。この「河内江厨」とは河内各所の「供御江」の総称であった。

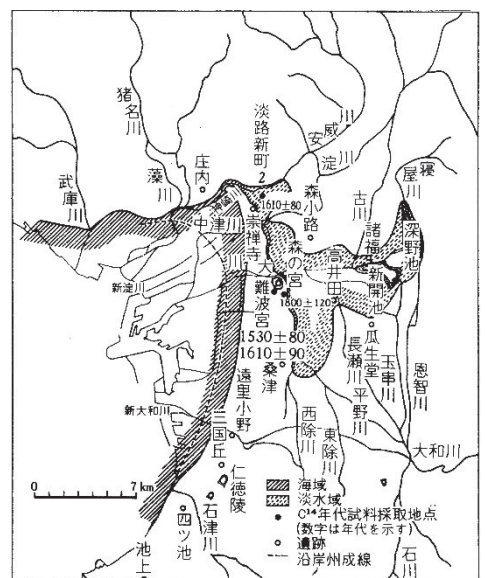


図2 約1800~1600年前の河内湖の古地理図
〔大阪府史編集専門委員会『大阪府史』
第1巻(大阪府、1978年)、89ページ〕

その後、延喜二年(九〇二)の荘園整理令による乱立した御厨の停止を経て、延喜五年(九〇五)に河内国に新たな皇室領「大江御厨」が設置される。これは河内国一円の池・河・津を所領とするものであった。枚岡神社の社家であった土豪の水走家に伝わる文書の中に、水走氏が平安末から鎌倉時代にかけて、「大江御厨山本河俣両執当職」に任ぜられたことを示す資料があり、「河俣」が大江御厨内部の重要拠点の一つであったことがわかる。この「河俣」が現在の東大阪市川俣に比定され、南に隣接する「御厨」の地名の由来と考えられる。つまり、「御厨」は古代の皇室との結びつきを表す由緒ある地名であり、いわば「御厨栄町」は、そんな新旧融合したネーミングなのである。

それでは御厨村は、いつからできたのか。それは江戸時代にさかのぼる。集落があった場所は大阪商業大学の北側に位置する天神社を中心とした地域である。御厨村は江戸期を通じてほぼ幕府領であったが、文政期より天保九年(一八三八)までは、三河西尾藩の譜代大名松平和泉守(乗寛)の私領であり、慶応元年(一

八六五)から、新選組がその支配下にあったことで知られる京都守護職(註1)の役知(註2)となる。寛保三年(一七四三)の「明細帳」(註3)によれば、村高一二一四石六斗七升九合、家数一八六軒、人数は男四四二人、女四八〇人(合計九二二人)と記される。

江戸時代の御厨村は北西部の奥方と旧楠根川に接する東部の堤方の二つの地域に分かれ、別々の村役人が置かれた。天保十年(一八三〇)の「在方便用録」(註4)によれば、御厨村には象五郎・勘左衛門の二人の庄屋が任じられている。このうち「象五郎」は堤方の大東象五郎で、「勘左衛門」は奥方の加藤勘左衛門であった。大東家は現在既になくなっていくが、加藤家は現在も御厨にあり、旧蔵の古文書資料は大阪商業大学商業史博物館に収蔵されている。

江戸時代後期の御厨村は村高一二一四石余りと比較的豊かな幕府領で、近隣の同格の経済力を有する四ヶ村とともに、大阪と奈良を最短距離で結ぶ暗越奈良街道の唯一の宿場、松原宿の助郷(註5)を務めた。この助郷に関する加藤家の資料は、昭和四十二年(一九六七)に刊行された『布施市史 第二巻』編纂時の基礎資料として利用されている。その一つに、安政六年(一八五九)「御老中間部下総守様御通行御継立諸入用相嵩松原宿元駅相手取出入中日記為取替証文写」(註6)という、見開き七十七頁に及ぶ古文書がある。これは、老中の間部詮勝(註7)(まなべあきかつ)が前年に幕府が無断調印した日米修好通商条約の勅許を求めたために上洛し、江戸へ帰府する際の暗越奈良街道松原宿継立費用の負担割合を争点に、助郷四ヶ村が元駅を相手取り大坂町奉行所へ訴え出た経緯をまとめた興味深い訴訟記録である。

しかしながら、この資料のなかにさらに刺激的な古

文書が隠されていた。上記資料の袋とじの内側に四枚の紙片が挟み込まれていたのである。慶応四年(一八六八)の「乍恐御歎願奉申上候」(註8)と題したこの資料は、同年二月朔日付になっており、戊辰戦争の発端である鳥羽・伏見の戦いが幕府軍の敗走で終わった後に、雄藩長州御役所に、御厨村を含む旧会津藩京都守護職役知の河内国元幕府領四ヶ村の連名で出された歎願書の写しである。解読すると次のような内容である。

我々四郡村々のうち石高一万七千石余が近年元会津藩役知に仰せ付けられました。この度改正くださり有り難く存じます。しかし、その後は領主未定のままです。村高に対して長州藩の掛札を頂戴したことは有り難く存じます。しかし、何分時節柄、万一悪党者や不穏なる乱暴者が現れるやも知れず、その際長州藩へ訴え出たく存じます。村々の百姓の人も自然と幕府方から雄藩の方へ押し移っているのか、想定していたことながら、実に村役人どもが不安がつておりますので、ご多用のところ催促がましく恐れ多いのですが、どうかご賢察のうえ支配をお決めいただきますよう、お願い申し上げます。

つまり、慶応三年(一八六七)の京都守護職廃止後、その役知を解かれ、長州藩の掛札(村高に対する年貢の差押え札)を下付された村々が、長州藩に対して支配を催促している内容である。動乱の時節柄もあるが、河内の農民のしたたかさが伝わってくる。これはほんの一例で、御厨村の古文書は地元の歴史を雄弁に語りかけてくれる。

以前、展示会の企画に関することで御厨の加藤正俊

氏(註9)にお会いした。その際、本筋にからめて「御厨」に関するお話を色々とお伺いしたことがある。加藤氏いわく、戦後はまだ御厨の周辺は田んぼが広がっていて、現在の大阪商業大学の方向に徐々に民家が建ち始めていた。田んぼを隔てて見えるその集落を、御厨ではどういうわけか「台湾」と呼んでいたという(註10)。その「台湾」が今や「大陸」なみに膨張している。これが「御厨栄町」である。

大阪商業大学商業史博物館では毎年古文書講座を開いているが、この講座では期中に一回現地見学会を行っている。以前、御厨村加藤家文書をテキストに使っていた際に、「旧御厨村内を探訪する」と題して大学が立地する「御厨栄町」から受講生を引き連れ、ひっそりとした旧村内を案内して回ったことがある。



図3 旧御厨村内にある加藤家の墓地



図4 鳥海右平汰墓

そのコースの中には神社やお寺のほかに墓地も含まれていた。それは加藤家の墓地(図3)で、旧村域西手の宅地と道路に囲まれた場所にある。加藤宏治氏(註11)いわく、むかしはそこにお寺があり庵寺(あんでら)と称していたところで、廃庵後、墓地としたものであるという。調べてみると、明治元年(一八六八)の「御厨村社寺取調書」の「西方庵」の項で、「無住」の後に「但、勘左衛門持」の記載があることから、旧「西方庵」の敷地であったと考えるのが妥当であろう(註12)。

そこに一基、加藤姓ではない墓石があり、「鳥海右平汰墓」と刻まれている(図4)。建てられた年代は墓石からは読み取れない。しかし、旧村内の西楽寺(浄土真宗西本願寺末寺)に残されている「過去帖」の加藤家分家の記録に「鳥海右平太」の名前があり、「天保十三年六月七日」の命日が記されている(註13)。加藤宏治氏の伝聞によれば、この人物は浄瑠璃や謡の師匠であったと伝えられているという。

加藤家文書の中にも鳥海家に関する資料がいくつか見受けられる。その中の文化三年(一八〇六)八月十九日付の「身請一札之事」(註14)によれば、「実父加藤後兵衛・「中谷惣左衛門」の名前で次のように「忤伍作」の身請けを証している。

一、私忤伍作儀当寅三十一才、此度鳥海三太夫死跡江入夫為致引続右三太夫同様御召抱被成下、御陣屋詰被為仰付候段難有仕合奉存候、右二付忤伍作勤役中自然私欲有之金銀引込等仕候ハ、私共方急度□□納仕

御殿様江毛頭御損失相掛不申上候、為後日身請一札如件

(傍点筆者)

趣旨としては、鳥海三太夫の死後、その後任に加藤後兵衛の息子伍作が陣屋詰に任命され、その身元保証人を引き受けたという趣旨の文面である。つまり、当時庄屋職を務めた加藤家の息子が陣屋詰勤務を拝命していることになる。鳥海家が武家であるとすれば、身分の違う家同士の養子縁組が成立しているわけで、興味深い史実である。

では、鳥海家というのは果たしてどういった職位で、また、右記資料に記された「殿様」というのはいったい誰なのか。

これを探る手がかりとして、同じく加藤家文書に「長尾陣屋鳥海久七郎」差出の書状(註15)がある。「如月廿日」としか表記がなく年代未詳ではあるが、鳥海家は「長尾陣屋」(図5)詰であったことがわかる。「長尾陣屋」というのは、旗本の久貝氏が元禄二年(一六

八九)に設けた陣屋で、現在の枚方市長尾に東西約六十間・南北三十間の敷地を擁していた(註16)。また、初代久貝正俊は元和五年(一六一九)に初めて大坂町奉行所が設けられた際の大坂東町奉行を任じられていることでもその名を知られている。



図5 枚方市津田元町2丁目の圓通寺に移築された長尾陣屋の旧陣屋門

そこで『枚方市史』を確認すると、第八巻・第九巻(註17)に「鳥海久七郎」「鳥海三太夫」の名前が複数確認できる。例えば、第九巻(史料IV)一九五頁に載る「規定一札」では、所領の村々が、江戸屋敷への仕送り銀の残金を引当に、金千両の借用をしたことに對する証文で、「御代官鳥海久七郎」の記載がある。したがって、鳥海家は長尾陣屋の代官であることがわかった。長尾陣屋は在地掌握を目的に設置されたとみられている。当初は江戸から代官が派遣され、在地代官の登用はなかったが、陣屋設置の翌年末に大庄屋職の代官登用が行われるようになった(註18)。

加藤家と鳥海家との間に姻戚関係ができた理由などについてはさらに詳細な調査が必要であるが、この墓

石は、前記のような庄屋家からの代官入夫・陣屋勤務の史実があったことを裏付ける重要な史跡といえる。

さて、「御厨栄町」から始まった件の見学会は、旧村内を走る旧暗越奈良街道を通り、天神社の境内を見学して、隣の西楽寺でお茶をいただきながら住職の講話に耳を傾け、最後に加藤家の墓地にお参りし、鳥海右平汰の墓石の前で参加者の方々に先述のくだりを簡単に説明した。

夕刻、見学会も無事終了し、古文書の内容を彷彿させる景観を堪能してようやく散会を告げた時、「御厨栄町」の目と鼻の先で、誰もが方角を見失っていた。



東大阪市指定天然記念物 天神社のクスノキ
(幹周 6.0m、樹齢 伝承 900年)

註

- (1) 幕末に尊王過激派の動きに不安を抱いた幕府が京都の治安を維持するために文久二年（一八六二）に設けた役職。京都所司代の上位に位置し、会津藩主松平容保が任ぜられた。
- (2) 要職の役人に在職中支給した領地
- (3) 河内国若江郡御厨村加藤家文書。村の概要を記した資料。資料番号七五九。

- (4) 河内国若江郡御厨村加藤家文書。各地の庄屋の名前、支配領主・代官などを村別に記して出版された書物。資料番号五六一。
- (5) 宿場の継立人馬を補充させるために、幕府が宿場付近の農民に課した夫役。松原宿の場合は夫役ではなく、宿場経費の四割を助郷村が負担する定めとなっていた。同宿は元駅四ヶ村（河内国河内郡松原村・水走村・豊浦村・額田村）と助郷五ヶ村（河内国河内郡吉田村・若江郡菱江村・御厨村・岩田村・高井田村）によって運営されていた。
- (6) 河内国若江郡御厨村加藤家文書、資料番号一〇〇〇。
- (7) 一八〇二—一八四（享和二年—明治十七年）。越前鯖江藩主。天保十一年（一八四〇）老中となるが、水野忠邦と合わず引退。安政五年（一八五八）に井伊直弼により再任され、翌年末辞職。
- (8) 御老中間部下総守様御通行御継立諸入用相嵩松原宿元駅相手取出入中日記為取替証文写」の中に隠されていたため、整理の際に確認できず、目録に収録されていない。
- (9) 御厨村庄屋加藤勘左衛門家の幕末の分家にあたる東加藤家と称される家系の子孫。同家二代前の加藤正後氏は、明治期の楠根川改修の際の功績により、天神社境内に顕彰碑が建てられている。
- (10) 桜井嘉平『むらの語りべ—河内の昔ばなし』（産経新聞生活情報センター、一九八八（昭和六十三）年）の「楠根川—少年時代の想い出（一）」の項には、「今より五、六十年も以前の時代」の高等小学校への通学に関するエピソードがあり、次のように記されている。

「その頃、御厨から西へ少し折れた場所

へ徐々に家屋が建ち並び、その小さい集落を、誰がいい出したのか「台湾」で通ってしまった。生徒たちは台湾の北の端くれを集集場所としていた。」

高等小学校があった時代であるから戦前のエピソードであるが、昭和六十三年より五・六十年前とすれば昭和十年前後のことであろうか。

(11) 御厨村庄屋加藤勘左衛門家の現当主。

(12) 『大阪商業大学商業史研究所資料目録 第三集（後編）』大阪商業大学商業史研究所、一九九七年、三五八頁。資料番号一三七七。

(13) 『大阪商業大学商業史研究所資料目録 第三集（後編）』大阪商業大学商業史研究所、一九九七年、三六二頁。

(14) 河内国若江郡御厨村加藤家文書。資料番号三六三。

(15) 河内国若江郡御厨村加藤家文書。資料番号四五〇—五三三。

(16) 村田路人『三浦家文書の調査と研究—近世後期北河内の医師三浦蘭苑蒐集史料—』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会、二〇〇七年、一五頁。

(17) 枚方市史編纂委員会『枚方市史 第八巻』枚方市役所、一九七一年。枚方市史編纂委員会『枚方市史 第九巻』枚方市役所、一九七四年。

(18) 前掲『三浦家文書の調査と研究—近世後期北河内の医師三浦蘭苑蒐集史料—』一六頁。

この原稿は、大阪商業大学比較地域研究所報『Midpost 第三十四号』（大阪商業大学比較地域研究所、二〇一六年）掲載の「東大阪だより 「御厨」について」に加筆修正を加えたものである。

（大阪商業大学商業史博物館学芸員）